短 報

ローデシアンリッジバックの類皮腫 (Dermoid Sinus) の1例

三輪恭嗣, 西村亮平, 石田曜子*, 佐々木伸雄, 小川博之

Dermoid Sinus in a Rhodesian Ridgeback

Yasutsugu MIWA, Ryohei NISHIMURA, Youko ISHIDA, Nobuo SASAKI and
Hiroyuki OGAWA

〔平成13年12月27日受付／平成14年2月1日受理〕

SUMMARY

A 7-month-old femal Rhodesian Ridgeback was referred for the cervical subcutaneous mass to the Veterinary Medical Center of the University of Tokyo. Thirty days before the first admission, the cervical mass was surgically removed by a practitioner but the mass with a cyst recurred at the surgical site soon after the removal. On physical examination, the mass with a size approximately 10cm in diameter was palpated on the dorsal midline of the neck. Serous fluid was drained from the self-scratched wound of the mass. The patient did not show pain by palpating the mass and was otherwise healthy. There were no abnormal findings on blood examination and on cervical and thoracic radiography. From above results, dermoid sinus of a Rhodesian Ridgeback was suspected. Magnetic resonance (MR) images revealed that the sinus seemed to extend ventrally to the nuchal ligament. After the MR imaging, the mass with the sinus reaching to the nuchal ligament was completely removed. On histology, the mass was inflammatory granulation tissue and the hair follicle was demonstrated in the sinus, thus diagnosed as dermoid sinus.

Key words : dermoid sinus (類皮腫), MR imaging (磁気共鳴画像検査), Rhodesian ridgeback (ローデシアンリッジバック)

はじめに

東京大学動物医療センター外科 (〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1)

Surgical Section, Veterinary Medical Center, The University of Tokyo, 1-1-1 Yayoi, Bunkyo-ku, Tokyo. 113-8657, Japan

* アニマルメディカルセンター (〒150-0046 東京都渋谷区松濤 2-3-10)

Animal Medical Center, 2-3-10, Shoto, Shibuyaku, Tokyo, 150-0046, Japan

類皮腫は神経外胚葉性の発生過程での異常により生じるものであり、胚発生期に神経溝と表皮との完全な分離が行われなかったことに起因すると考えられている。本症は頸部から尾部の背部正中に沿ってどこにでも多発性または単独で発生する。通常は深部へと続く索状物を持つ腫瘤を皮下に形

図1 ローデシアンリッジバック (Rhodesian Ridgeback)
背側正中に沿った逆毛が特徴

図2 頸部皮下腫瘍 (矢印)

成するか、腫瘍部に感染や炎症があると痛みを生じる可能性があり、さらにそれらが深部にまで達すると髄膜炎や脊髄炎などによる臨床症状を呈することがある^{5), 6), 10)}。

治療法は外科的切除であり、術前に神経症状がなく、完全な切除が可能であれば予後は良好である。本症はヒト⁵⁾、ラット⁵⁾、マウス⁹⁾、羊²⁾や他犬種^{5), 10-12)}での発生が報告されているが、ローデシアンリッジバック (Rhodesian ridgeback) とその雑種に明らかに好発する傾向があり、その遺伝的背景が強く示唆されている^{1, 3, 5-8, 13)}。

ローデシアンリッジバックはアフリカのローデシア地方 (現在のザンビア、ジンバブエ) を原産国とし、その名の由来となった背側正中に沿った逆毛が特徴的な大型の犬種 (図1) である。現在は警察犬や護衛犬としてアフリカを中心に飼育さ

れているが、我が国における飼育頭数は非常に少ない。このため本犬種に好発する疾患である類皮腫の本邦における認知度も低いものと思われる。

今回、我々はローデシアンリッジバックの本症の一例に遭遇し、若干の知見を得た。

症 例

症例はローデシアンリッジバックの雌、7ヵ月齢、体重 29.6 kg で、生後 72 日齢時に 5 種混合ワクチン、97 日齢時に狂犬病のワクチンを頸部皮下に接種された。飼主は狂犬病ワクチン接種後 60 日目に頸部正中に直径約 5 cm の皮下腫瘍があるのに気付く、近医を受診し、エンロフロキサシンを投与されたが良化せず、その 13 日後に同腫瘍の切除術を行った。この際、腫瘍は皮下から頸

図3 症例の頸部MR横断像(T1強調像, SE法, ST = 740 m sec, TE = 38 m sec) 頸部皮下腫瘍(矢頭)から伸びる索状物(矢印)が項靱帯付近まで達している。

図4 術中所見
皮下腫瘍から深部へと伸びる索状組織(矢印)は項靱帯(矢頭)を中心に二分し、そこで終わっていた。

図5 摘出した腫瘍
皮下の嚢胞状部(矢頭)と索状組織(矢印)

部の筋肉にまで達し、中心部には被毛が生え、周囲は結合組織に囲まれていた。腫瘍除去後4日目頃から術部に漿液が貯留し始めたためドレーンを装着したところ、その3日後には排液が止まり、術後21日目に抜糸した。しかし、抜糸後9日目に再び術部に漿液が貯留してきたため当院を紹介された。当院初診時、症例の一般状態は良好で頸部に直径約10 cmの皮下腫瘍(図2)が見られる以外異常はみられなかった。触診により、この腫瘍は有茎状に下の筋層に固着しているのが確認でき、また腫瘍表面には自搔した傷から漿液様の液体が瘻出していた。血液検査、頸部および胸部レントゲン検査で異常所見は認められなかったため、翌日MRI検査後に腫瘍摘出術を行う予定とした。

麻酔はミダゾラム(0.1 mg/kg IV)、ブトルファノール(0.2 mg/kg IV)前投与後、チオペンタールナトリウムを挿管可能となるまで静脈内投与しイソフルレンにて維持した。MRI検査では腫瘍から伸びる索状物が項靱帯付近まで達しているのが確認されたが、髄膜には達していないと考えられた(図3)。この検査結果を基に同腫瘍の摘出術を行ったところ、腫瘍は皮下に嚢胞を形成し、そこから索状物が有茎状に伸展しており、この索状物は筋層を通り、項靱帯を中心に二分しそこで終わっていた(図4)。摘出した腫瘍(図5)は皮下の嚢胞状部分とそこから伸びる索状部分から成っていた。同腫瘍は病理組織学的に炎症性肉芽組織と診断されたが、索状部分の組織には毛細胞等が確認され、最終的に類皮腫と診断された。

症例は術後3日で退院し、術後10日までは少量の浸出液が術部から出ていたが、それ以降は液体の瘻出や貯留、腫瘍の再発等もなく術後90日以上経過した現在経過は良好である。

考 察

類皮腫は、すべての犬種に発生する可能性があるが、ローデシアンリッジバックとその雑種において明らかに好発する傾向があり、その遺伝的背景が強く示唆されている疾患である。こうしたあ

る特定犬種に好発する疾患を考慮することは診断を行う上で非常に重要かつ有用である。しかし、本犬種のわが国における飼育頭数は非常に少なく、本疾患の認知度も低いものと思われる。今回の症例ではワクチン接種部と腫瘍の部位が一致したため、当初、ワクチン関連性肉腫等の腫瘍性変化も考慮に入れたが、犬種、臨床症状、MR画像などから術前に類皮腫の可能性が高いと判断した。本症の診断法として脊髄造影や神経刺激の少ない造影剤を用いた瘻管造影により腫瘍の深部を判定するという方法が報告されている^{5, 6, 8, 10)}。今回の症例では一度腫瘍摘出術を行っていたこともあり術前評価としてMRI検査を行った。MRI検査では皮下腫瘍から伸びる索状の組織が確認でき、診断と手術時のアプローチ法の決定に有用であった。腫瘍の完全切除を行ったところ腫瘍は皮下の嚢胞状部とそこから伸びる索状部から成っており、Mann, G. E.らの分類⁷⁾ではtype IIに属すると考えられた。術後90日経過した現在腫瘍の再発等は見られず経過は良好である。今回我々は本疾患のように特定犬種に好発する疾患を十分把握しておくことの重要性和本疾患のような症例でのMRI検査の有効性を再認識した。

要 約

7ヵ月齢のローデシアンリッジバックが頸部背側の腫瘍を主訴に来院した。犬種、臨床症状、MRIから本犬種に好発するとされる類皮腫を疑い、術前MRIを基に術時のアプローチ法を決定し、同腫瘍摘出術を行ったところ良好な結果が得られた。本疾患のように特定犬種に好発する疾患を充分把握しておくことの重要性和本疾患のような症例でのMRIの有効性を再確認した。

文 献

- 1) Antin, I. P. (1970) : Dermoid sinus in a Rhodesian ridgeback dog. J. Am. Vet. Med. Assoc. 157 : 961-962.
- 2) Baharsefat, M., Amjadi, A. R., Yamini, B.

- and Ahourai, P. (1972) : Epidermal cyst in the spinal cord of a lamb. *Vet Rec.* 91 : 36-38.
- 3) Hathcock, J. T., Clampett, E. G. and Broadstone, R. V. (1979) : Dermoid siuns in a Rhodesian ridgeback. *Vet. Med. / Small Anim. Clin.* 74 : 53-56.
- 4) LeCouteur, R. A. and Grandy, J. L. (2000) : Diseases of the spinal cord. In : Text book of Veterinary Internal Medicine. (Ettinger, S. ed.), pp. 608-656. W. B. Saunders, Philadlphia.
- 5) Levine, S. (1966) : Epidermoid cysts of the spinal cord : a spontaneous disease of rats. *J. Neuropathol Exp Neurol.* 25 : 498-504.
- 6) Lord, L. H., Cawley, A. J. and Gilray, J. (1957) : Mid-dorsal dermoid sinuses in Rhodesian ridgeback dogs-A case report. *J. Am. Vet. Med. Assoc.* 149 : 515-517.
- 7) Mann, G. E. and Stratton, J. (1966) : Dermoid sinus in the Rhodesian ridgeback. *J. Small Anim. Pract.* 7 : 631-642.
- 8) Marks, S. L., Harari, J. and Dernell, W. S. (1993) : Dermoid sinus in a Rhodesian ridgeback. *J. Small Anim. Pract.* 34 : 356-358.
- 9) Nobel, T. A., Nyska, A., Pirak, M., Skolnik, M. and Meshorer, A. (1987) : Epidermoid cysts in the central nervous system of mice. *J. Comp. Path.* 97 : 357-359.
- 10) Selcer, E. A., Helman, R. G. and Selcer, R. R. (1984) : Dermoid sinus in a shih-tzu and a boxer. *J. Am. Anim. Hosp. Assoc.* 20 : 634-636.
- 11) Shamir, M. H., Lichovsky, D., Aizenberg, I. and Chrisman, C. L. (1999) : Parital surgical removal of an intramedullary epidermoid cyst from the spinal cord of a dog. *J. Small Anim. Pract.* 40 : 439-442.
- 12) Tomlinson, J., Higgins, R. J., LeCouteur, R. A. and Knapp, D. (1988) : Intraspinal epidermoid cyst in a dog. *J. Am. Vet. Med. Assoc.* 193 : 1435-1436.
- 13) Tshamala, M. and Moens, Y. (2000) : True dermoid cyst in a rhodesian ridgeback. *J. Small Anim. Pract.* 41 : 352-353.